

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	詩の櫻・歌の櫻 : 論文
Author(s)	田中, 辰二
Citation	龍南, 2 3 4 : 1 - 2 4
Issue date	1936-06-01
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/7325
Right	

詩の櫻・歌の櫻

田 中 辰 二

(まへがき)——本稿は別に「龍南」の爲に記したのでは無く、實はG・Kから放送した梗概の覚え書に過ぎない。慙うしたものを、慙うした雑誌に出すのは私の希望では無いし、程度も低い趣味本位のものであるけれども、雑誌部長八波敬授や雑誌部委員から無理に出せと云はれたので穴埋めのつもりで筆を執つた。呉々も俗に流れてゐることは御宥恕ありたい。

小學校に入るが否や眞つ先に讀方で

サイタ サイタ サクラガサイタ

と親しまれる櫻、或は本居宣長の

敷島の太和心を人間は朝日に匂ふ山櫻花

と云ふ和歌や 又は唱歌としても親しまれてゐるあの慈鎮和尚の今様歌

春の彌生のあけぼのに 四方の山邊を見渡せば

花ざかりかも白雪の かゝらぬ峯こそ無かりけれ

で連想される櫻 春と云へば櫻、花と云つても櫻を思ひ浮べるのがわが日本人で、櫻に對する本當の趣味は古今東西を通じて日本人にのみ與へられた特權の樣にも考へられる。

花より明るみよし野の春の曙見渡せば もろこし人も高麗人も大和心になりぬべし

とあるやうに淡白な朝日に映ゆる花を見ては清らかな心を感じずにはゐられない。本當に氣持のいゝものは櫻——

Cherry-blossoms ではない——わが國華たる「やくら」である。

一体櫻は薔薇科の植物で亞細亞にも歐羅巴にも分布して其の種類は多い。が、わが日本の櫻ほど美しくも勝れた花は他に何れにあらう。支那の四川省あたりに分布してゐる野生の櫻や、ヒマラヤ山中の一部にあるヒマラヤ櫻、さては小亞細亞あたりから擴まつて行つた西洋實櫻と云つたものもあるが、日本の櫻は日本の土地に野生した原種から出發したものと考えられる。勿論今日諸所に見られる吉野櫻、明治以來全國に擴まつた染井吉野・彼岸櫻・江戸彼岸その變種の絲櫻、さては山櫻やその變種の牡丹櫻とか右近櫻・里櫻・富士櫻・丁字・深山・四季・寒櫻・冬櫻等々品種の改良せられたものでなく、奈良朝や平安朝に喜ばれた櫻は多くは一重の白山櫻が普通で春の頃、赤や茶蒨黃、綠など樹々によつては違ふが色とりどりの若葉まじりに咲出す白又は淡紅の花に當時の人々の心はいやが上に動かされたのであつた。

花に鳴く鶯、水にせむ情の聲をきけば生きとし生けるもの何れが歌をよまざるべき

と古今和歌集の序文には見えて居るが、まして心ある人々が花を見て、あゝ美しいと深く感じる時に其の詠歎が歌となり詩となつてあらはれることは何も不思議は無い。然るにわが神代の記録を見ると其處には一首も櫻に關する歌が残されてはゐない。神話の中に出て參られる非常に美しい女性に木花開耶毘賣と云ふ方があるが、其の木花は今日の櫻であらうと一般からは考へられてゐる。此の姫君は大山祇の御娘で高天原から降臨された瓊々杵尊がそのお美しさに御心を惹かれ給うたと神話には傳へてゐるが、それ程お美しき姫君の名に櫻がパツと美しく咲いたやうな形容のつく事も故なきでは無いが、木花が櫻であらうと云ふ事は後世の學者の想像で、櫻だと明白に言切つてゐる譯では無し、櫻の語原も實際の所類似した語からの想像説だけでは斷定が出来かねるのである。では何故神話中に櫻を賞美するやうな歌が残されてゐないのであらうか。申すまでも無く日本の神代を初め上代の歴史は「生み」と「統べ」の物語であつて多くの神々から國土山川草木が生れ、それが君を中心とする國家と云ふ形態に統べられて行く大精神のもとに記されたものであ

るだけに、後の詩や歌に見るやうな風月花鳥を詠むと云つた所謂風流の歌は悉く省略され、物語の進行に必要な問答體のものや諷刺歌と云つたやうなもののみが残されたに過ぎないと思はれる。實際今日古事記や日本紀を見ても純粹の叙景歌と思はれるものが何等から寓意や諷刺があるやうに他の説話と結びつけられて記載せられてゐる所から考へても物語に關係のあるやうなものでなければ採らなかつた撰者の態度が窺はれるのである。

上代に風流を詠じたものが一首もないから上代は風流を解しなかつたのだと説く人があればそれは全くの誤解と云はねばなるまい。所が日本紀の中に唯一首、櫻の名が見えてゐる歌がある。それは允恭天皇の御製でなつかしき衣通毘賣を偲びまつつて折柄美しく咲きほこつてゐる井戸端の櫻によそへられて

花細し櫻の愛こと愛でば早くは愛でずわが愛づる子等

と仰せられたと傳へるお歌である。この一首の御製の意味を拜すると「花の中でも美しい櫻のやうにわが愛するそなたよ、このやうになつかしくてたまらないなら、早くからそなたを愛すればよかつたのに惜しいことをしたものである本當にいとしい姫よ」と云つたお心持で、もとより櫻そのものをお歌ひ遊ばしたのでは無く、櫻を目ざむる程におきれいな衣通毘賣に譬へられたに過ぎないのであるが、既にこのお歌を拜すると其の裏に美しい方の譬喩に持つて來られる程の櫻の美しさを御認めになつてゐられたことも拜察出来る。でこそ櫻と云ふ言葉を引出す枕詞に「花細し」と見えるのである。花ぐはしと云ふと花の中でも大變立派な結構な花であると云つた心持であるから、櫻の美しさは當時の人々には充分感じられた事であると考へられる。

大和朝廷時代の歌を中心としてゐる萬葉集の中にも卷十六には櫻兒と云ふ女性が存在する。櫻兒に關する詳細な事は不明であるけれども、その歌の序文で見ると二人の男性が此の櫻兒を何とかして得たいものだといどみ合ふ。果ては二人の男性は生命をかけて相手を倒してでも、その櫻兒を得たいと云ふ熱烈さを見せて來る。これを知つた櫻兒は昔より

この方、一人の女の身で二人の男の家に嫁ぐと云ふことは聞いた事が無い、と云つて此の儘にして置いたら二人の男性の心は平和にはなり得まい、一層自分が死んでしまつて、二人の男の争をやめさせるに如くまいと決心して、氣の毒にも林の中に入つて、とある樹の枝で首を縊つて死んでしまふ。流石の男達もこれを知り悲しみに堪へお互にやる瀬ない悲痛の心を歌にした

春さらばかざしにせんとわが思ひし櫻の花は散にけるかも

あゝ春になつたらあの美しい櫻の花を手折つてかざしにしようものをもと思つた甲斐もなく、その櫻の花——いちらしい櫻児ははかなくも散つてしまつた事であるよ、惜しみても餘りある事だと云つたやうな心持で一方の男が歌ふと、一方の男も歌ふ

妹が名にかけたる櫻花咲かば常にや戀ひむいや年のはに

なつかしい戀人の名にしてゐたその美しい櫻の花が咲いたら、いつもいつもそれを見ては戀人と戀ひなつかしんでゐようか、毎年毎年來る春ごとにその櫻が咲きもしようものを、と、云つたやうな心をこめて歎き悲しんだのであつた。一人の女性を二人の男が挑み合ふ、つまり妻争の説話は萬葉集にまだ例はあるけれど他の妻争説話は大概女が水の中に飛びこんで死んでゐるのに此の櫻児だけは名前から樹に縁があると見えて死場所を樹の枝に借りてゐる。それはそれとして櫻児が名に耻ぢぬ程の美しさがあればこそ二人の男性の心をかくまで惹きつけた事でもあらう。

もう萬葉集頭になると櫻の美しさを歌つたものが相當あらはれて來て、うらゝかな春光をめであると云つた風習も見え

る。萬葉に若宮年生魚鷹の

をとめ等が挿頭かざしの爲に、遊士あそびのかづらの爲を敷きませる國のはたてに咲きにける櫻の花の匂ひはもあなに

と云ふ長歌とその反歌

去年の今日逢へりし君に戀ひにてき櫻の花は迎へ來らしも

と云ふのが見える。乙女等が頭の飾にする爲に又男の人達が同じく飾りのかづらにしようが爲に大君の治めます國の隅々までも咲いた櫻の花の美しさは、あゝさて／＼面白い事ではある。その櫻咲く去年の春、花の盛に花見がてらに逢ひ睦んだ人と別れての後非常になつかしく思つてゐたが今日ゆくりなくも亦、櫻の下でお目にかゝるとは定めし櫻の花がその人を迎へたのであらうと歡喜に満ちた心持が、浮れた春、櫻を機縁に如何にも和やかに映し出されてゐるを感じる。

見渡せば春日の野邊に霞立ちさき匂へる櫻花かも

は糺糊とし靈鑪として咲き匂つてゐる櫻の美、その美を慕つては夜も櫻を照す月が出よとばかりに

春日なる三笠の山に月や出でぬかも佐紀山に咲ける櫻の花の見ゆべく

と云つた旋頭歌も萬葉集には見えてゐる。

梅に比べて櫻の花の壽命は短い、咲いたかと思ふ間もなくはら／＼と散つてしまふ。それを潔い武士の氣持に譬へることはまだ奈良朝時代には餘り見かけないが花の壽命の慌たゞしさは誰も認めてゐたやうで春になると咲くが否や散るのが惜しいから咲かずにせめて蕾のまゝにゐて呉れよと

春去れば散らまく惜しみ櫻花しましは咲かず含みてもかも

と歌つたり、春雨よひどく降るな、まだ見ぬ中に散つてしまふのが惜しいと

春雨はいたくな降りそ櫻花いまだ見なくに散らまく惜しも

と詠んだ歌も萬葉には見える

はら／＼と散りゆく櫻

佐保山の櫻の花は今日もかも散り亂るらむ見る人なしに

美しければ美しかつた程、散つての哀愁は深いもの、まして盛り過ぎず人から慕はれなつかしまれつゝ散り行く櫻の風情

櫻花時は過ぎねど見る人の戀の盛と今し散るらむ

と云ふのも萬葉歌人の風流である。

が奈良朝は前明代からの名残で支那の文化に強き憧憬をよせてゐただけに、支那の人々が櫻の趣味より梅を愛好してその方面に詩や文が多いのに刺戟されてか、公卿殿上人仲間梅の咲く頃、梅花の宴を催し興する方面もあつたやうである。天平十二年正月九州の總督にも當る太宰府の大伴旅人が自分の邸で宴を張り集つた人々が梅の花を詠じた歌を澤山作つたがそれ等の一班も萬葉集で明に知れてゐる。

唯單に奈良朝のみでは無い、恠うした風潮は平安朝の頃にも一部に見出し得る。仁明天皇の承和十一年十二月、天皇が紫宸殿にお出ましになつて群臣に宴を賜うた事がある。御殿のお前の梅の枝などを折つて皇太子様はじめ侍臣達が挿頭にして楽しんだと云ふやうな記事が「續日本後紀」には見えてゐる。申すまでも無く紫宸殿は宮中でも大切な御殿であるが、桓武天皇が延暦十三年都を平安京におうつし遊ばした砌、此の御殿の御前には梅をお植ゑ遊ばし、猶此の土地が、もと橘太夫の邸跡だとあつて橘も植ゑられたが、仁明天皇の承和年中に此の梅が枯れたので爾來梅をやめて櫻にした由が「東齋隨筆」と云ふ書物に見えてゐる。

梅を櫻にかへた、いはゞ何でも無い事の様ではあるが人々の趣味が梅から櫻へ移つて行く一面の表れと見て見られな

いことは無いと思ふ。

百敷の大宮人はいとまあれや梅をかざしてこゝに集へる

といふのは萬葉集にある歌で梅の花をかざして遊ぶ大宮人のどやかさを描いてゐるが同じ歌が平安朝を越して鎌倉時代の初期に出た新古今和歌集あたりになると

百敷の大宮人はいとまあれや櫻かざして今日も暮しつ

と改作されてゐる。

尤も新古今和歌集は古今和歌集についての立派な勅撰集ではあるが、萬葉集あたりの歌で改作されて載つてゐる例はまだ他にも見出し得る。例へば萬葉集の中に見える持統天皇の御製

春過ぎて夏来るらし白妙の衣ほしたり天の香具山

が「新古今」になると

春過ぎて夏來にけらし白妙の衣ほすてふ天の香具山となつてゐる。改作と云ふよりは改悪されてゐる所から判斷すると、餘程慎重に撰をしたにも拘はらず撰者の誤解に基いたものとも考へられるが、又一面には、古い調子を新古今調に改めたのであると云ふ人もある。まだこんな例は他にもあるが何れにもせよ「百敷の大宮人はいとまあれや梅をかざしてこゝに集へる」の「梅をかざしてこゝに集へる」が「櫻かざして今日も暮しつ」と改められて居る所に、梅から櫻へと趣味が移つて參つた平安朝以來の傾向も映し出されてゐるやうに思はれる。

此の櫻の花を愛づる御宴——花の宴が朝廷で初めて催はされたのは弘仁三年の事で、嵯峨天皇が此の年 神泉苑に行幸遊ばして櫻の花を親しく御觀賞宴を賜ひ、文人詩を賦し樂を奏して杯をあげ祿を賜うた由が見えて居る。而して國民の自覺をいろ／＼な方面で呼びさまして來た此の平安朝時代にわが國華たる櫻が強く人々の頭に印象づけられて來たことも當然と云へば當然であらう。この頃から櫻と云へば花の代表の様に考へられ、當時「祭」と云へば賀茂祭、「山」と云へば比叡山、「寺」と云へば三井寺をさすやうに、詩に文に「花」とあると、特別の斷り書のない場合はこの櫻の花

をさしたものである。それまでに當時の人々の心を囚へたのだから雨につけ風につけ、花が散りはせぬかと花故に心を悩ます風流人も多かつたことと思はれる。

世の中に絶えて櫻の無かりせば春の心はのどけからまし

と在原業平は歌ひもした。もとより此の歌の眞意は 文徳天皇の長皇子にましました惟喬親王をしのび奉つたものであるやうであるが表面の意味からすれば花ある故に傷心の春も感じられたのである。

身にかへて惜しむにとまる花ならば今日や我世のかぎりならまし

と源俊賴も歌つた。

それ程の櫻である。藤原良房が御女にあたられる文徳天皇の皇后宮の御前の花瓶にさしてある櫻の花を見て

年ふれば齡は老いぬしかはあれど花をし見れば物思ひもなし

と詠じ、花の蔭を慕うては凡河内躬恒も

今日のみと春を思はぬ時だにも立つことやすき花の影かは

と歌ひました。讀人知らずの歌にも

櫻狩雨はふり來ぬ同じくは濡るとも花の蔭にかくれむ

とある。かの歌人西行は誠に玲瓏無碍の人、棄恩入無爲は如來の教なりと觀じて墨染の衣にやつれ、旅から旅へと暮して全く愁などは微塵も無かつたが、花三度咲き且つ散るを眺めた吉野山で、

吉野山去年の葉の道かへてまだ見ぬ方の花を尋ねむ

と詠じもし、花故に月故に惜しくなる生命を思ひ

願はくば花の下にて春死なむそのきさらぎの望月のころ

かの釋加入涅槃と同じ頃花の下で春死にたいと櫻の花に無限の執着をしたのである。

佛には櫻の花を奉れわが後の世に人とぶらはゞ

とも詠んでゐる。世捨人の西行すら然りである。

太平を樂しむ王朝時代の人々の櫻に對する愛着は誠に甚しいものがあつたことは、いろいろ物語を見ても詩歌を見ても知り得られる。誰が作つた詩か今日判然としてゐないが櫻花詞と云ふのがある、この詩は琵琶の「櫻狩」などにも組み込まれて吟詠されてゐるが、櫻に關するいろいろの人々の逸話や故事をならべ立てゝゐる。

薄命能伸旬日壽、

納言姓字胃斯花、

零丁借宿平忠鷹、

吟咏恨風源義家、

志賀浦蓑翻暖雪、

奈良都古簇香霞、

南朝天子今何在、

欲望芳山路更賒、

と云ふのがそれである。

薄命能く伸ぶ旬日の壽、納言の姓字斯の花を胃す、櫻を愛でて吉野の山を慕ひ、町に櫻を植ゑならべて其の間に家を建て住んだ中納言藤原成範。世に櫻町中納言と云ふのは此の人の事である、納言の姓字斯の花を胃した譯である。此の櫻町中納言は非常に櫻が好きであつたが爲に、櫻の壽命が七日計りで過ぎてしまふのが惜しくて惜しくて堪らない、何とかして櫻の花を長く止めて置きたいものと天照大神に祈願をこめた甲斐あつてか、其の壽櫻が例年になく長く咲いたと平家物語には見えてゐる、源平盛衰記には成範が泰山府君に祈つたやうに記されてゐるが兎に角薄命能く伸ぶ旬日の壽と云つたのはこれをさしたのである。

それ程までの櫻、詩人も墨客も、其の色香をめづる事は並大抵では無かつた。

平家の大将薩摩守平忠度も此の櫻には一かどの愛着をもつてゐた。源氏に追はれて平家一門と共に西へと落ちのびるに當り、淀の川尻まで行つた忠度は、こつそり駒をひきかへして京神五條の藤原俊成の門を訪れたのであつた。落人なるが故に俊成も戸を細目にあけて内には入れずに對面したと傳へるが、其の折忠度は家集一卷をとり出して師の俊成にやがて勅撰集の御沙汰あらば思召して頂きたいと云ひ殘すや否や、再び駒を西の方へ返した。世鎮まつてから俊成は勅を受けて千載和歌等を撰んだ際忠度の故郷花と題した一首の歌をその勅撰集に撰んだ。

さゞ波や志賀の都は荒れにしを昔ながらの山ざくらかな

如何にも名歌である。けれども落人の歌とあつてはと氣兼ねた俊成は、此の歌を讀人知らずとして載せたのであつた謡曲では「志賀忠度」や「俊成忠度」の曲に作つてゐるが、殊に「俊成忠度」に於ては、忠度の亡靈が俊成の所へ來て折角の歌を載せて呉れるのに讀人知らずとされたので浮ばれないと云つたやうな心を洩らしてゐる。がもとよりこれは狂言綺語の初類で讀人知らずとあつても天下に讀人を知らないものは無いのが此の山櫻の歌である。

山櫻百には洩れて千に入り

と云ふ川柳がある。百人一首には此の歌は入らなかつたが千載集には載つたと云ふ心である。

名はかくれても名の高い山櫻

千載に讀人知れた櫻なり

千載に日蔭の櫻散り残り

山櫻讀人知らぬものは無し

などは皆これと思ひ浮べた句である、志賀の都は荒れにしを——志賀の浦は荒れて晴雪翻りと云つたのは忠度の詠んだ山櫻をさしたものである。

その忠度が須磨の板宿を過ぎ渚に沿うて落行く所を、源氏の岡部六彌太忠澄等、六七騎が追つて來た、忠度の郎黨も打たれて唯殘るのは薩摩守忠度一人、もとより忠度は熊野育ちの剛のもの、岡部六彌太とつ組んで兩馬の間にどつと落ち、六彌太を組み敷いてこれを刺さうとしたときに、六彌太の郎黨は走り來つて忠度の右の手をバツサリと切落した今は忠度も絶体絶命である、左の手で六彌太を投げつけ西に向つて光明遍照十方世界、念佛衆生攝取不捨と云ひも果てぬに岡部六彌太は忠度の首を打落したと傳へる。

一時は押へられた六彌太

龜の子のやうに六彌太起上り

忠度が念佛を唱へてゐる間は

稱名のうち、六彌太は腰を揉み

でもあつたらう。其の折忠度の簾につけてある短冊を見ると、「旅宿花」と云ふ題で

行きくれて木の下蔭を宿とせば花やこよひのあるじならまし

忠 度

とあつたので初めて平家の大将、忠度の最期と云ふ事が知れたのであつた。櫻花の詞に零丁——零丁は困つた様子であるが——宿を借る平忠度と云つたのはこれをさしたものである。

行きくれて木の下蔭を宿とせばも軍半ばに見出された歌である。

忙しい軍なかばに行き暮れて

忠度は木賃も出さず宿を借り

はら／＼と散る櫻、忠度の鎧も

忠度は其の夜小櫻絨なり

忠度の夜具は櫻の總模様

などと云つた句も見えてゐる。歌人だけに山櫻の下に行きくれたのは結構なこと、他の平家の一門は西海の波に赤符を染めた。

忠度の外は浪路に行きくれる

でもある。

忠度と櫻、武將と散り際のいゝ櫻との對照は誠に氣持のいゝものである、源家の名將八幡太郎源義家も奥州を治めて約十年、漸く小康を得て一時都に戻らうと勿來の關にさしかゝつた時、今や春も深みわたつたと見えて櫻の花が散つてゐる。

吹く風を勿來の關と思へども道もせにちる山櫻かな

と云ふ一首の歌を詠じて其の風流を世に知られたのであつた。同じく櫻花詞に、吟咏風を恨む源義家と云つたのはこれである。

道もせまき程に散る山櫻

踏めば惜しふまでは行かむ方もなし心づくしの山櫻かな

と歌つた女性もあれば、かの大中臣輔親の女伊勢大輔が、上東門院にお目通した折、奈良の八重櫻を献上するものゝあるのを見て

いにしへの奈良のみやこの八重櫻けふ九重に匂ひぬるかな

と一首の歌にその雅懷を知らしめた事もある。奈良の都は古りて香霞簇るの句は、古の奈良の都の八重櫻の故事である。かくして平安朝時代には種々な方面から喜ばれた櫻である。源氏物語の中にも立ち去りにくき花の蔭で殿上人たちが

催馬樂をうたふ所もあればお庭の櫻の下に春の日を樂しむ所もあり、春の名にも「花の宴」もある。作者紫式部が理想的に描いた女主人公の紫の上の少女時代、かい間見た源氏がその美に心をひかれて

面影は身をも離れず山櫻心の限りとめて來しかど

と折柄咲いてゐた櫻によそへた歌も見えれば、春を好み櫻をめられるその紫の上の暮しさを「春の曙の霞の間より面白き樺櫻の咲き亂れたるを見る」心地にたとへた所もある。「堤中納言物語」にも「花櫻折る少將」と云つた題材も囚へてゐるし、現實の世界の中でも

花咲かば告げむと云ひし山守の來る音すなり馬に鞍置け

と歌つた武人もある。

其の櫻を愛するの餘り能因法師は花の咲いてゐる間はわが家に歸らずして友の大江公資の家に泊りこんで毎日其の家の櫻を賞でてゐたと云ふ逸話も傳へられ、すこしでも散らずに居てほしいと花咲く間を毎日心經を唱へて居たと云ふ眞如法師と云ふ人もあり、死んでも花の傍から離れぬ胡蝶になりたいと願ひつゝ死んだ大江依國の如き人もある。

謡曲で親しまれてゐる熊野も亦櫻と共に思ひ出されるやさしき女性である。熊野の事は平家物語卷十の「海道下り」の條の中に見えてゐるが、遠江池田の宿の長者の女で八島の大臣平宗盛に召されてひどく寵愛を受けてゐたのであつたこの熊野には老母があつて故郷遠江に残してある。都に召されて寵愛は受けてゐても國許の病める母の事を思へば熊野はたまらなく悲しい。宗盛に暇を貰はうと思つたけれど中々許して呉れさうもない。頃は三月、櫻の盛りであつたが宗盛につれられて花見にと出で立つた熊野は、櫻の花の一ひら二ひら散るのを眺めて

如何にせむ都の春も惜しけれどなれし東の花や散るらむ

の一首の和歌を詠じた。この歌にすっかり感じたのは宗盛であつた。いしくも仕つたるものかなと感心のあまり、直に暇が許されて熊野は故郷に歸ることが出來た。平家物語には「海道一の名人にて候や」と云つてゐる。川柳にも

毛氈の上から熊野は暇乞

よい時分引つばずしたは熊野御前

とある。いつまでも宗盛の傍にゐたら平家没落と共にどんなになつたかわからない。馴れし東の花や散るらんで去つたのは賢明でもあつたらう。

さて一般に櫻を愛好する熱の高まつたのは平安朝頃からと云つてもよろしかうが、此の平安朝が過ぎて武家時代になると、其處にはかの弘安の役のやうな對外的な問題が起りもした、彼を撃滅し蒙古勢を再び立つなからしめてからと云ふものは國民の自覺はいやが上にあがつたのであるが、間もなく北條高時々代の失政を現出して正中の變・元弘の亂のやうなものも起り、恐れ多くも勅命を無視した反軍が後醍醐天皇を隠岐へうつし奉らうとするやうな事件も生じた。其の時である、兒島備後三郎高德は一族郎黨と共に臨幸の途上、聖駕を奪ひ奉らうと船坂山にかくれて待ち奉つたのであるが、播磨の今宿から急に山陰道の方へ向はせられると聞いて間道傳ひに杉坂に参つた。けれども此の時は既に聖駕は院の庄へ入らせ給うたと聞いて一同は落膽の餘りちり／＼ばら／＼になつてしまつた。けれども高德はせめて、わが心在天聽に達しようと行在所の御庭に忍び入つて櫻の木を創り

天莫_レ空_二勾_一踐

時非_レ無_レ范_二蠹_一

と云ふ詩の句を記した。翌日警固の武士どもがこれを見付けたがよめるものが無い、主上に申上げるとみそなはせられて其の意味をおさとり遊ばし龍顔殊の外うるはしかつたと拜してゐる。齋藤監物はこれを詩につくつて

踏破千山萬嶽煙

驚興今日到何邊

單簷直入虎狼窟

一七深探蛟鰐淵

報國單心嗟獨力

回天事業奈空拳

數行紅淚數行字、

附與櫻花奏九天

櫻花に附與して九天に奏す、櫻の幹を削つてわが赤心を披握し奉つた。

忠臣の矢立の中に散る櫻

三郎は筆で毛蟲を拂ひのけ

櫻だから毛蟲もゐたであらう。

落書をしたで高德名を残し

など云つた柳句も残つてゐる。同じ落書でも宸襟を安んじ奉るのは臣下として最も願はしい所、それを高德がやつてのけたのであつた。

後醍醐天皇は一度隠岐へ御遷幸遊ばしたが、北條氏の滅亡と共に都にお戻り遊ばして建武中興の實をあげられた。が、恩賞其の他様々な原因から中興の實も崩れて行つて果ては叛逆の將尊氏のごときものを出すに至つて南風競はず、北關を望みつゝ空しく吉野の皇居にゐますより他に方法が無かつた。誠においたはしい限である。

諸國には勅王の兵が星の如く雲の如くに起つた。九州に於ても菊池武敏の弟武光は征西將軍懷良親王を奉じて賊將少貳頼尙の軍を筑後川のほとりに破つた事もある。けれども親王薨去後は菊池氏も亦衰へざるを得なかつたのであつた。

南朝五十七年、後年八田知紀が

吉野山霞の奥は知らねども見ゆる限りは櫻なりけり

と歌つたあの華やかな吉野山も、南朝にとつては、誠に悲壯な存在であつたに違ひない。後醍醐天皇の御製こゝにても雲居の櫻さきにけり唯かりそめの宿と思ふに

都だにさびしかりしを雲はれぬ吉野の奥の五月雨の頃

長慶天皇の御製

わが宿と頼まずながら吉野山花になれぬる春もいくとせ

と云ふやうな御句を拜すると熱涙の頬に傳はるのを覚える。

花は吉野、吉野は南朝の歴史と共にわが國民の腦裏から永久に消え失せまい。藤井竹外の詩に

古陵 松柏吼_ミ天驪、

山寺尋_レ春寂寥

眉雪 老僧時輟_レ帶、

落花深處說_ニ南朝_一

も亦我々の胸を打つものがある。

前申した櫻花詞にある南朝の天子今何くにか在します、芳山を望まんと欲すれば道更に餘かなりと云ふ句は吉野山の櫻に歴史的の追懷を含ませたればこそである。

しかし世の中が又太平になると、のどかな心で櫻を眺めるのも日本人である。徒然草の著者吉田兼好は嵯峨仁私寺のほとり双の岡に櫻を植ゑて

契り置く花と双の岡の上にあはれ幾世の春をすぐさん

と歌ひ双の岡の粹法師とさへ呼ばれた。秀吉の時代となつては、文祿三年秀吉等が行つた吉野の花見及び豪奢を極めた醍醐の花見が慶長三年に行はれた事も餘りにも有名な話ではある。

やゝ時代が下つては嵐山に花を賞で金の蒔繪を施した竹の皮を惜しげもなく投げたと云ふ尾形光琳の話も名高ければ繪師三熊花顛の名も亦忘れ難いものであらう。花顛三熊思孝は京都鳴瀧の人、櫻の繪をかく事が好きで彼の主張によると櫻は日本の花であり、これを描くのは、とりも直さず大和魂をあらはすものである。然るに「枕草子」には繪に描き

劣りのするものとして櫻の花をあげたのは、これを描くべき名人が無かつたからに他ならぬ。自分は一所懸命にこの櫻の花の精をかいて日本の譽をあげねばならないと云つたやうなことをいつも口癖にしてゐた。おまけに口計りでは無い、花時になると至る所へ花を寫生に出かけたものだ。後には櫻の花を描く名人となつて此の花顛の描いた櫻の繪をかけて置くといつも胡蝶がその繪のあたりに飛んで來ると云ふやうな事まで言はれたものである。此の花顛の死に際がまた奇抜である、自分が死んだら骨は焼いて川の中へ捨てゝ呉れ、そして自分の墓場をつくるならそこに櫻一本だけ植ゑて呉れと云ふ徹底ぶりであつた。彼が死んだ時に彼の友人達は其の遺言によつて遺骨を澤山櫻のある嵯峨の戸南瀬の流に投げすて、墓場には櫻を植ゑたと云ふのだから花顛も本望だつたと思ふ。かの續「近世畸人傳」と云ふ書物は此の花顛が編纂したのを伴荒蹊が抄閲したもので「續近世畸人傳」の前に出た伴荒蹊の「近世畸人傳」にも花顛は其の挿畫を描いてゐる。

俳人も亦非常に櫻を愛した。旅の俳人芭蕉も

春の夜は櫻に明けてしまひけり

と吟じた。何となく氣持のよい春の夜、春宵一刻值千金、花朧の一夜ははかなくも明けるのを誰しも感じる事であらう江戸を背景とした彼の句にも

花の雲鐘は上野か淺草か

と云ふのがある。さびを愛する芭蕉、靜寂を好む芭蕉にも亦櫻故には明るいのだやかな句があるのである。一面雲か霞かと見紛ふやうな櫻、その春の夕暮撞き出されて來る鐘の音、餘韻嫋々、上野東叡山寛永寺の鐘であらうか、はた淺草金龍山淺草寺の鐘であらうか、如何にもものんびりした夢に夢見るやうな氣持がせざるを得ないのである。奈良を訪れては

奈良七重七堂伽藍八重櫻

嵯峨にあつては

花の山二丁のぼれば大悲閣

その他芭蕉の櫻をよんだ句も澤山にある。又蕉門の人々にも此の種の吟は多いが蕉門十哲の一人榎本其角が吉野山に行つたときに吟じた。

明星や櫻さだめぬ山かつら

の句も有名である。山かつらと云ふと曉に山になびく横雲の事をさしたもので、まだすつかり夜が明けきらず曉の明星がキラ／＼と空にまたゝいてゐる其の下あたり、吉野の山はと見ると櫻がほんのり白く見え横雲もなびいて雲か花かはつきり見定め難いと云つたやうな意味で誠に神韻縹渺たる句、作者の其角もこれを作つたときにはさまで自分で佳いとは思はなかつたのであつたが、後に芭蕉が吉野山に遊んで明星が山かつらに明け残る景色を見て、其角の名句を非常に感じたと云ふ事があつてからは此の句が一層名高くなり、其角自身も得意になつたと云ふ事である。同じく蕉門十哲の一人嵐雪の句にも

花に風輕く來て吹け酒の泡

と云ふのがある。花盛の折柄、櫻の下での酒宴でもあらうか、春風よ花を散らさぬ程に、持つた盃の泡を消さない程度に輕く吹けよと如何にもなごやかな氣分のする句であると思ふ。櫻故には一層この氣分はよく滲んで來てゐるでは無いか。

同じく蕉門十哲の一人向井去來の句には

何事ぞ花見る人の長刀

同じく兄弟弟子の森川許六の句にも

槍持は立ちばかりて花見かな

と云ふがある、武家時代であるだけに、こんな情景も見られたのであらう。伊丹の鬼貫は

咲くからに見るからに花の散るからに

與謝蕪村

嵯峨ひと日閑院様の櫻かな

み吉野の近道寒し山櫻

祇や鑑や髯に落花をひねりけり

をはじめ多くの句を残してゐる。お馴染の信州の俳人一茶も

花のかげあかの他人は無かりけり

咲く花の中にうごめく衆生かな

此のやうな末世を櫻だらけかな

と云つたものを初め櫻の句を相當残してゐる。其の他俳人の句をならべ立てゝも江戸時代から今日に至るまでには數限りなくよまれてゐて枚擧に邊が無い程であるが、其の中であまり文學的には大したものでは無い癖に割合に人口に膾炙されて有名になつてゐるものに安原貞室の

これはく〜と計り花の吉野山

と云ふがある。花はよしと吉野山に引つかけた駄洒落で、貞室などの屬してゐる松永貞徳一派の所謂貞門派の俳諧には好んで、かうしたかけ言葉や縁語を用ゐたものである。これはく〜と計り花の吉野山とあるので、皮肉な川柳の方で

は、「これはく」と云ふ所に目をつけて

吉野山何ぞもらつたやうにほめ

吉野山お久握の様にほめ

などとも見えてゐる。貞室とやらんでやはり有名になつた句に、時代は下るがお秋と云ふ其角の弟子に當る一女性のよんだ俳句もある。此のお秋は江戸小網町の菓子屋の娘で俳名を秋色と云つてゐた。秋色女の十三歳の折、上野寛永寺境内清水堂のうしろの井戸端の所の櫻の傍に、よろく」と千鳥足で行く花見客を眺めて

井戸端の櫻あぶなし酒の酔

と吟じた。これが江戸中の評判となつて其の櫻は秋色櫻と呼ばれるやうになり十三才の少女は面目を施した譯であるが何しろ十三歳で十七文字の俳句をよんだと云ふので

十三の春十七の名を残し

生酔が來ぬと名の無い櫻なり

と云つたやうな類句も澤山に見出される。

かく種々な人々により、あらゆる階級を通じ、あらゆる時代を通じてひどく國民に愛好せられた花は櫻で、國の花即ち國華たる名にふさはしいものと考へられる。

が、こゝに櫻の花をして更に意義づけさせたものは徳川時代の國學者であらう。一體徳川時代の初期は文學などに對して自由研鑽の傾向がかなり加はつて來たのであつた。先づ第一に文學方面で革新のろしをあげたものは和歌壇であらう。それまでは公卿や殿上人たちのみが歌をよむもので、本當の師範家にでもつかねば作つたところで歌では無いと考へるやうな偏狹な考を持つものも無いで無かつた。そして秘事秘傳と云つたものまでが尊ばれた。古今傳授と云つた

やうなものも多少の意義は認められるけれど歌壇を全く行きづまらせてしまつた罪も亦大きなものであると云はねばならない。然るに自由に研究して行かうとする新人たちは何も古今集などをお手本にしくつたつていゝ。古今集は最初に出た勅撰集かも知れないが、それよりも以前にも「萬葉集」と云ふ立派な歌集がある。それ計りぢや無い、古事記、日本記をはじめ古い文献にも歌も澤山載せられてゐる。然らば和歌の源流は古今集よりもつと以前に溯らねばならない。さう考へた人々も相當に出て來た。第一に名乗りをあげたのが木下長嘯子で

敷島の道すぐにしもふみわけん人はよもぎのあさましの世や

と叫んだのであつた。以後有名な人々に下河邊長流・僧契沖・江戸に戸田茂睡などが出る、これも多少ひねくれ者のやうな感のする學者・歌人達ではあるが今日から見れば、それ等の人々の功蹟は相當に大きいものゝあるのを覺える。

此の契沖の後に出了た國學者に荷田春滿がある、神官だけに日本の神々に對する敬虔の念はいつも非常に強く打ちつけてゐた誠に固い人で、生涯に一首も戀歌をよまなかつたと云ふ位、その人の弟子に賀茂眞淵があり、又眞淵とは松坂の一夜に逢つたきりで以後は文通のみで師弟の關係を保つてゐた本居宣長があり、宣長の聲名を慕つて伊勢松坂に行つた折は宣長の死後だつたので其の墓に詣り門弟帳に自己の名を記して押しかけ弟子になつた平田篤胤と云つた國學者も世に出た。

所が社會の一面には儒教が非常に盛な時代で、家康以來國を治めるのは一にも儒教、二にも儒教と云つた有様で中には日本は駄目だ、支那の方がゑらいと思つてゐた様な學者も世にはあつたのである。丁度近代でも歐米文化に心酔のあまり歐米の方がわれよりも遙に勝れてゐるとして何でも其の模倣しようとする人々もあるやうだが、誠に日本人としては唾棄すべきものと云はねばならない。

にも拘はらず徳川時代には隨分支那かぶれ——尤も堯舜龜陽の時代を夢みてゐるからではあるが——の人々が自らを

卑しとし、忠も孝も儒教が入り来るまでは日本には無かつたの、やれ未開蒙昧だつたのと偏狹な儒者達は勝手な熱をあげ、甚だしきに至つては皇室の尊嚴まで傷つけるやうなものが出るに及んだのであつた。かゝる偏狹な論議が腐儒の口に筆にのせられるに及んでは國學者たるもの黙つては居られない。そこで春滿はまだそれ程では無かつたが眞淵・宣長・篤胤などに至つては支那かぶれの腐れ儒者の漢心に對して極力反對せざるを得なかつたのである。その餘り國學者も亦極端な方面に走つて行つた嫌ひが無いでも無い。眞淵の如きは梅はいゝものだが支那人が好きだから自分は好かぬと云つた風で多分の感情も混じて來たことは争はれない。

勿論當時の儒者のどれもが悪いのとは無い、儒者中でも本當の學者、大局を忘れ字義の本に走つてゐるやうなもので無い碩學は日本の尊嚴を認め、又武士道の完成にも寄與する所が多であり、國學者の第一聲と、これ等眞に國を思ふ本當の腐儒ならざる儒者あたりの聲に王政復古の熱も昂められた譯であるが、兎に角國學者の漢心排斥はあらゆる日本の美しさを探求させる上に非常に役立つたのであつた。其處に櫻の花が在來の美しさよりもつと氣高いものとして眺められもしたのである。

もろこしの人に見せばやみ吉野の吉野の山の山櫻花

と賀茂眞淵は歌つた。宣長も

汝が國にこの花ありやと唐人に櫻を見せていらへ聞かずや

どうだ、お前の國にはこんな結構な櫻はあるまいかと唐人に見せつけてその答が聞いて見たいと云ふ所に、國華たる櫻に對する日本人の誇を充分に感じてゐるのである。

伴薦蹊は歌ふ

さま／＼の花はあれども日の本の春の光は櫻なりけり

田安藩の侍臣で明治四年に死んだ、かの井上文雄と云ふ國學者は

いさぎよきやまと心を心にてよそには咲かぬ花ざくらかな

とも歌つた。

櫻の花は實に淡泊なわが日本人の心情にふさはしいものであつて何の執着もなく一度に、さつと散つてしまふ氣持はいつまでもくゞ咲きのこり萎れた姿を見せる花のそれよりもどれ程我々の心を惹きつけるかわからない。櫻の花は日本人の心そのまゝの樣にも考へられる。

敷島の大和心を人間はゞ朝日に匂ふ山櫻花期日に照り映ゆる明朗な櫻、その櫻を愛したあまりに佐久良東雄と名をかへた人もある。佐久良東雄は元來坊さんであつたが天保十二年その三十一歳の春思ふ所あつて僧をやめ、日本精神の純眞さに生きようとして國華の櫻の名を己が名としたのである。此の人の櫻に關する歌は多い中にも

ことしあらば我大君の大御爲人もかくこそ散るべかりけれ
と云ふのがある。

擬つては百鍊の鐵となり發いては萬衆の櫻となる、而かも大君の大御爲には一夜にもさつと散つてしまふ櫻の花のやうな純眞さ、人もかくこそ散るべかりけれど、殊に武士道の完成した徳川期には一面に墮弱なものも無いでは無かつたが、散るを惜しまぬ大和魂と云ふ氣持は、わが國民に多分に持つてゐた所で、主君を憐まし奉り國を案つて而かも腹も切れないやうな武士は武士の風上にも置けぬ卑怯未練なものと考へられたのである。

元祿十四年三月勅使下向の砌伊達左京亮宗春と共に饗應後を仰せつかつた淺野内匠頭長矩が、その十四日吉良上野介義央を斬りつけたが事はたさず田村右京太夫建顯邸にお預即日切腹と云ふ事になつたとき、白無垢姿の内匠頭が折柄ハラ／＼と夕風に誘はれて散る櫻の花を眺めて

風さそふ花よりも猶われはまた春の名残をいかにとかせんと
の辭世を残したと傳へられる。

サクラ——ハラキリ——日本の姿として、フジヤマと共に外國人にまで知れわたつてゐるのは故なきでは無い。

繰りかへして云ふ。わが日本の上下に而かも昔から、今猶依然としてなつかしまれてゐるのは此の櫻の花である。小唄にも、俗曲にも櫻を主材としたものが澤山あるのは衆知の事實である。實際櫻と共に春のなごやかさは層一層加はつて來るのを覺える。

併し春來りなば櫻は咲く。國華たる櫻は、日本の津々浦々に至るまで、その美しい姿を見せるであらう。そして花に浮かれ、又傷心の春に涙する子もあらう、けれど、今や國をあげて内外諸多の方面に大に考慮を拂はねばならぬ時節ではある。浮かれる心より轉じて、あらゆる方面に於て大和心を凝視し、再認識して櫻咲く日本に生れた喜びを喜んで行く事を私は心より希望してやまない。